新しい詩を読む

現代イギリス・アメリカの詩

合評

金関寿夫
川崎寿彦
橋口稔

KENKYUSHA

〈検印省略〉

新しい詩を読む
—現代イギリス・アメリカの詩—

昭和 47 年 11 月 1 日 印刷　　昭和 47 年 11 月 10 日 初版発行

著　者　金関寿夫
　　川崎寿彦
　　橋口稔
発行者　小酒井益蔵　東京都新宿区神楽坂 1 の 2
印刷者　研究社印刷株式会社　東京都新宿区神楽坂 1 の 2

発行所　研究社出版株式会社　〒162
東京都新宿区神楽坂 1 の 2
振替口座東京 83761 番
電話東京 03(269)4521(代)

定価 1,000 円
1098-411034-1860

新しい詩を読む

―現代イギリス・アメリカの詩―

合　評
金　関　寿　夫
川　崎　寿　彦
橋　口　　稔

東京　研　究　社　出版

ACKNOWLEDGEMENTS

For permission to reprint and translate the poems in this volume, acknowledgement is made to the following:

For ROBERT LOWELL: to the author and Farrar, Straus & Giroux, Inc. for 'Skunk Hour', from *Life Studies* by Robert Lowell, Copyright © 1959 by Robert Lowell.

For THOM GUNN: to the author and Faber & Faber Ltd. for 'On the Move', from *The Sense of Movement* by Thom Gunn, Copyright © 1957 by Thom Gunn.

For JOHN BERRYMAN: to his literary executor and William Sloane Associates, Inc. for 'Winter Landscape', from *The Dispossessed* by John Berryman, Copyright © 1948 by John Berryman.

For W. H. AUDEN: to the author and Faber & Faber Ltd. for 'Musée des Beaux Arts', from *Collected Shorter Poems 1927–1957* by W. H. Auden, Copyright © 1957 by W. H. Auden.

For RICHARD WILBUR: to the author and Harcourt Brace Jovanovich, Inc. for 'Thyme Flowering among Rocks', from *Walking to Sleep* by Richard Wilbur, Copyright © 1968 by Richard Wilbur.

For TED HUGHES: to the author and Faber & Faber Ltd. for 'Pike', from *Lupercal* by Ted Hughes, Copyright © 1960 by Ted Hughes.

For THEODORE ROETHKE: to Mrs. Beatrice Roethke and Doubleday & Company for 'Elegy for Jane', from *The*

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Waking by Theodore Roethke, Copyright © 1953 by Theodore Roethke.

For ROBERT BLY: to the author and Wesleyan University Press for 'Poem against the British' and 'Driving toward the Lac Qui Parle River', from *Silence in the Snowy Fields* by Robert Bly, Copyright © 1962 by Robert Bly.

For SYLVIA PLATH: to Olwyn Hughes and Heinemann Ltd. for the 'The Stones', from *The Colossus* by Sylvia Plath, Copyright © 1960 by Sylvia Plath.

For DENISE LEVERTOV: to the author and New Directions Publishing Corporation for 'Lonely Man', Copyright © Denise Levertov Goodman 1958, from *The Jacob's Ladder* by Denise Levertov, and for 'Song for Ishtar', Copyright © Denise Levertov Goodman 1962, from *O Taste and See* by Denise Levertov.

For CHARLES OLSON: to his literary executor and Four Seasons Foundation for 'Other Than', from *In Cold Hell in Thicket* by Charles Olson, Copyright © 1967 by Charles Olson.

For PHILIP LARKIN: to the author and The Marvell Press for 'Church Going', from *The Less Deceived* by Philip Larkin, Copyright © 1955 by Philip Larkin.

For JAMES DICKEY: to the author and Wesleyan University Press for 'Sled Burial, Dream Ceremony', from *Buckdancer's Choice* by James Dickey, Copyright © 1965 by James Dickey.

はしがき

私たち三人が一昨年『英語青年』誌上で試みた英米現代詩の合評が、こんど一冊の本にまとめられた。

英米のごく新しい詩人を摑えて、ほとんど出たとこ勝負の論評を加えたのだから、いま読み返してみると後悔するようなことも言っている。敷衍したい、言い直したいといった衝動も起ってくる。しかしそうした評者自身の不満を解消しようとするなら、おそらくあの合評をはじめからもう一度やり直さなければならなくなるだろう。だから私たちは、もとの合評記事に部分的に手を入れるだけにとどめた。それに、お読みになればわかることだが、合評で取り上げたどの作品についても、私たち三人の間だけでもじつにさまざまな解釈の相違が出てきた。だからそうしたものの決定稿などというものはおそらくありえない。ただこの合評が、それを読んで下さる読者自身の鑑賞への、いわば踏み台としてなんらかの参考にでもなれば、それだけで私たちは幸せなのである。

最後にこの骨の折れる合評の方針や運営について一年間献身的に私たちを助けて下さった『英語青年』編集長小出二郎氏、そしてこれが本になるに際してすべてのアレンジを引き受けて下さった研究社編集部の加藤嘉雄氏に厚くお礼を申し上げたい。

1972年7月

金関寿夫
川崎寿彦
橋口稔

目　次

ACKNOWLEDGEMENTS 3

はしがき 5

イギリス現代詩展望 9

50年代以後のアメリカ詩 17

合　評

1. ROBERT LOWELL
   Skunk Hour 35

2. THOM GUNN
   On the Move 54

3. JOHN BERRYMAN
   Winter Landscape 70

4. RICHARD WILBUR
   Thyme Flowering among Rocks 89

5. TED HUGHES
   Pike 111

6. THEODORE ROETHKE
   Elegy for Jane 133

7. ROBERT BLY
   Poem against the British 155
   Driving toward the Lac Qui Parle River . 156

8. SYLVIA PLATH
   The Stones 176

9. DENISE LEVERTOV
Lonely Man 198
Song for Ishtar 199

10. CHARLES OLSON
Other Than 218

11. PHILIP LARKIN
Church Going 235

12. JAMES DICKEY
Sled Burial, Dream Ceremony 255

現代詩と、批評のあり方 275

参 考 書 目 285

—

LIST OF ILLUSTRATIONS

ROBERT LOWELL . . 34
JOHN BERRYMAN . . 69
BRUEGEL, '*Le tombée de Icare*' 75
THYME 103
PIKE 121
ROBERT BLY 154
DENISE LEVERTOV . 197
PHILIP LARKIN . . . 234
THOM GUNN 53
BRUEGEL, '*Les chasseurs dans la neige*' 73
RICHARD WILBUR . 88
TED HUGHES 110
THEODORE ROETHKE 132
SYLVIA PLATH . . . 175
CHARLES OLSON . . 217
JAMES DICKEY . . . 254

イギリス現代詩展望
―― 私の経験に即して ――

橋　口　　稔

私自身の経験に即して語るなら、私が初めて接したイギリスの現代詩は、『荒地』(*The Waste Land*) を初めとする T. S. エリオット (T. S. Eliot, 1888–1965) の作品であり、ついで、エリオットに反撥しながらもその展開であった1930年代の詩、すなわちオーデン (W. H. Auden, 1907–) やスペンダー (Stephen Spender, 1909–) の詩にうつり、さらに、エリオットやオーデンにくらべれば反知性的で自己陶酔的なディラン・トマス (Dylan Thomas, 1914–53) を読むようになった。私がこれらの現代詩を読んだのは、第二次世界大戦が終り、日本が戦後の混乱からようやく少しずつ立ち直りかけていた頃であって、少なくとも私に関するかぎり、第一次大戦後のイギリスの精神状況を、第二次大戦後の日本の状況に何となく引きうつしていたようなところがある。

言うまでもなく、エリオットもオーデンもトマスも、第二次大戦で言えば戦前の詩人である。これらの詩人たちの作品を踏まえた上で、それ以後の詩人たちの傾向が気になるようになったところで、ようやく私のイギリスの現代詩に対する関心も同時代性を持つようになったわけである。たまたま1953年頃から『エンカウンター』(*Encounter*) とか『ロンドン・マガジーン』(*The London Magazine*) といった雑誌が創刊されたこともあって、その同時代的関心が少しずつ掻き立てられつつあったところへ、私にとって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

最も大きな出来事であったのは、1955年にアントニー・スウェイト (Anthony Thwaite, 1930-) が来日したことであった。

今、ペンギン版の『1945年以後のイギリス詩』(*British Poetry since 1945*) を見ると、スウェイトの詩は〈ムーヴメント以後〉(Post-Movement) の詩人たちという分類の筆頭に収められている。しかし、当時私の眼には、スウェイトは〈ムーヴメント〉(The Movement) の詩人の中でもいちばん若いメンバーのようにうつっていたものである。いや、当時はまだ〈ムーヴメント〉という呼名は、わが国ではまだ一般化していなかったかもしれない。それでも、1955年の暮には、スウェイトよりも前から滞日していた、やはり詩人の D. J. エンライト (D. J. Enright, 1920-) が編集して『1950年代のイギリス詩人』(*Poets of the 1950's*) というアンソロジーが日本で出版されていた。ここには、エイミス (Kingsley Amis, 1922-) とかラーキン (Philip Larkin, 1922-) とかウェイン (John Wain, 1925-) とかジェニングズ (Elizabeth Jennings, 1926-) とかデイヴィー (Donald Davie, 1922-) とかホロウェイ (John Holloway, 1920-) という、〈ムーヴメント〉の重立った詩人たちはみんな顔を揃えていて、こうして日本にも、イギリス詩の趨勢がほとんど時間的なずれを持たずに、入ってきていたのである。

アントニー・スウェイトもまた、2年の滞在中に『イギリスの現代詩』(*Essays on Contemporary English Poetry*) という本をつくって、その最終章「1950年以後の詩」('Poetry Since 1950') において、いちばん新しい状況を生まの形で書き残して行った。

それから早くも15年の歳月が流れている。それなのに私はどうもイギリスの今日の詩について、〈ムーヴメント〉以後、はっきりした展望を持ち得ないでいる。たとえ1955年頃の時点で、同

時代性を得たように思ったにしても、じつは私の知識は、エリオットからオーデン、トマスを経て、〈ムーヴメント〉の詩へと、いわば点をつないだ細い線でしかなかったのである。つなぐべき次の点が見つからぬ時、私の展望はぼんやり霞まずにはいない。もちろん、新しい詩を読んでいないわけではない。今も挙げたペンギン版の『1945年以後のイギリス詩』は最も手頃なものだろうし、それ以前にも、アルヴァリーズ (A. Alvarez, 1929-) 編集の『新しい詩』(*The New Poetry*) があったし、ペンギンからは1962年以来「ペンギン・モダーン・ポエツ」(Penguin Modern Poets) のシリーズが、現在までのところで20冊ほど刊行されているし、もっと新しいところではフェイバーから出始めている『ポエトリー——イントロダクション』(*Poetry: Introduction*) のシリーズもある。こういった動きを追いながらも、しかも私の追う点は、〈ムーヴメント〉以後、はっきりした線を延長させることができないでいる。

問題は、そもそも、点と線による理解が不充分なものであったということであろう。

〈ムーヴメント〉以後の詩に強いて点をつなごうというのであれば、たとえば『1945年以後のイギリス詩』におけるエドワード・ルーシー=スミス (Edward Lucie-Smith, 1933-) の分類に助けを借りたりして、それをすることができないわけではない。

まず、当のルーシー=スミスを頭に頂く個人的な集りで、〈ムーヴメント〉にならってか、ただ〈グループ〉(The Group) と呼ばれる詩人たちがいる。

テッド・ヒューズ (Ted Hughes, 1930-), シルヴィア・プラース (Sylvia Plath, 1932–63), アルヴァリーズといった詩人たちは、ルーシー=スミスによって〈表現主義派〉として一括されて

いる。

マイケル・ハンバーガー (Michael Hamburger, 1924–), チャールズ・トムリンソン (Charles Tomlinson, 1927–) のように、外国の影響を強く受けている詩人たちもいる。

もっと若い詩人たちとしては、〈マージー・サウンド〉 (the Mersey Sound) とか〈リヴァプール・グループ〉 (Liverpool Group) と呼ばれる、ビート的な詩人たちもいる。

いっぽうイアン・ハミルトン (Ian Hamilton, 1938–) を初め、〈ミニマリスト〉 (minimalist) とか〈ミニアチュリスト〉 (miniarturist) とでも呼べるような、もっぱら短かい詩を書く人たちがいる。

こういう漠然とした見取図も描けないわけではないが、ルーシー=スミスの分類も、〈表現主義派〉とか、〈外国からの影響〉とか、〈スコットランド系〉とか、およそ規準のはっきりしないバラバラのものであることが、何よりもまず、統一の見られないイギリス詩の現状を明らかにしているであろう。

繰り返して言うが、問題は点と線による理解では不充分だということであろう。

今日われわれは、とかく1920年代の詩をエリオットの『荒地』に代表させて考えがちである。しかし、むしろ『荒地』はその例外的な前衛性によって、つまり強烈な点であることによって、時代を動かしたのであって、1920年代を支配していた一般的な傾向は、つまり広い面として存在していたのは、むしろ〈ジョージ王朝詩〉 (Georgian Poetry) のほうであったろう。

〈ムーヴメント〉を含めて、それ以後のイギリス詩を読む時、エリオットに代表されるモダニズムの影響はむしろ小さかったように思われる。あのモダニズムの運動をアメリカだけのものにす

ぎなかったとすることはできないにしても、イギリス詩全体の流れの中で考えれば、それはあまり大きな影響を持つものではなかったのかもしれない。

1967年の夏、私は二月ほどイギリスに滞在した。テームズ南岸に立つモダーンなホールでは〈ポエトリー・インターナショナル '67〉という詩の朗読会が五日にわたって開かれていた。私の行った日には、パブロ・ネルーダ (Pablo Neruda, 1904–), ウンガレッティ (Giuseppe Ungaretti, 1880–1970), エンツェンスバーガー (Hans Magnus Enzensberger, 1929–), ギンズバーグ (Allen Ginsberg, 1926–), チャールズ・オルソン (Charles Olson, 1910–70) と並んで、オーデン、スペンダー、エンプソン (William Empson, 1906–) の三人が演壇に坐っていた。

いっぽう、大英博物館では、現代詩人の原稿の展覧会が開かれていて、同時に、詩の朗読会も行われていた。(まったく余談だが、この展覧会には、詩人でもあり図書館司書でもあるフィリップ・ラーキンの力がかなりあずかっていたようである。) 私が行った日に詩を読んだのは、ジョン・ベッチェマン (John Betjeman, 1906–) とスティーヴィー・スミス (Stevie Smith) であった。こちらのほうが、地味な会ではあったが、静かな聴衆の自然な共感をかち得ていたようであった。

私はこの二つの詩の朗読会に、イギリス詩の表と裏を見たように思った。遠く日本にいると、とかく表しか見えないけれども、じつは裏のひろがりのほうが、大きくて根強いのであろう。

今日のイギリスで詩の雑誌ということなら、まず『レヴュー』誌 (*the Review*) を挙げねばなるまい。(よけいな修飾を排して定冠詞だけですますというのが、〈ムーヴメント〉以来一つの傾向になっているらしい。) この小雑誌に「オピニオン」という欄が

あって、毎号詩人が一人ずつ意見を述べている。1970年の秋に出た第25号では、他ならぬアントニー・スウェイトがこの欄に書いていた。

帰国後もずっと詩を書きつづけていて、何冊かの詩集を出しているだけでなく、BBCで詩の朗読のプログラムを担当したり、その後は『ニューステイツマン』誌（*The New Statesman and Nation*）の文芸欄の編集に関係したりしているスウェイトであってみれば、その〈意見〉には、今日のイギリス詩の生まの現況が反映していないはずがない。しかし、逆に言えば、あまりに内側から書きすぎていて、われわれには解りにくい点も多い。私なりに理解したところで、二つの問題点をそこから取り上げてみたいと思う。

一つは〈ポエトリー・エスタブリッシュメント〉と呼ばれるものについてである。

エスタブリッシュメントとは、既成のものであって、若い者や新人や前衛なら、反抗しようとするものであろう。ところが、スウェイトの言うには、今や若い者も新人も前衛も、すみやかにエスタブリッシュメントに組みこまれてしまう。ポエトリー・エスタブリッシュメントとしては、BBC放送局や、大学や、週刊誌や日曜新聞や、芸術振興会やポエトリー・ブック・ソサエティーや、大出版社がある。

これは、イギリスという保守的な社会の伝統の根強さによって説明されることではなくて、むしろ、西欧型近代社会に最近起りつつある、マス・コミュニケイション時代の特徴の一つであろう。どうやら最近のイギリスの詩人たちに起っていることは、日本でも作家たちに起っていることに似ているらしい。BBCはさかんに新人を取り上げるし、「ペンギン・モダーン・ポエツ」は5万部、6万部と売れるという。若い詩人たちが詩を発表して一

応認められるのは、むしろやさしくなっているが、気がついてみると、たちまち何らかの〈ポエトリー・エスタブリッシュメント〉に組みこまれてしまっている。こういう、一見華やかだが内実はお寒い、安定した状況の中で、非常にきわだった詩人はあらわれなくなってしまっている。詩人が、社会や文化のもっている隠れた危険を、いち早く先取りして察知し、それを表現するがゆえに危険視されるといったことはなくなってしまっている。最近の詩人たちが〈外国からの影響〉とか〈スコットランド系〉とか、そういう分類によってしか説明できないのも、無理はないであろう。

このような傾向は、じつは〈ムーヴメント〉の詩人たちからすでに見られたものである。ただ〈ムーヴメント〉の詩人たちの場合は、彼等が文化なり社会なりに対して積極的に働きかけようとはせずに、むしろ受身の、ストイックな態度をとった時、それは、彼等以前の詩人たちの、積極的に働きかけすぎがちであった態度に対する、一つのアンチテーゼとして、それなりの意味を持っていた。ところが、〈ムーヴメント〉以後の詩人たちにおいては、そのアンチテーゼとしての意味が失われたところへもってきて、大衆社会の芸術状況の影響も加わって、伝統ばかりでなく前衛までも、すべてが風化し始めているように思われる。

スウェイトのエッセイから読みとられた、もう一つの問題点というのは、イギリス詩のアメリカ詩との関係の問題である。

〈ムーヴメント〉以後、イギリス詩に目ざましい展開のなかった間に、イギリスではアメリカの詩に対する強い関心が見られた。アルヴァリーズがペンギンのために編集した『新しい詩』に、ローエルとベリマンを取り上げて称讃したのは、一つの事件に近いことであったろう。この二人にとどまらず、ウィルバーやレトキ、さらにハート・クレインやカーロス・ウィリアムズ、もう一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com